

人権なら

2022年3月1日

第135号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

人類最高の完成に向けて

全国水平社創立100年を迎え、新たに決意

1922年3月3日。全国から3000人もの若者たちが京都に集い、全国水平社の創立大会を開いた。「人の世に熱あれ、



人間に光あれ」と謳った水平社宣言を採択。「団結せよ」と全国の仲間呼びかけた。水平社は各地で次々と組織され、奈良県では5月に結成された。

部落差別は明治の解放令後も温存された。水平社の創立は大正デモクラシー期に。戦時下では戦争協力も。戦後の部落解放運動は自主解放の精神を引き継ぎ、大衆を組織した。運動は大高揚。成果を挙げた。マイノリティの運動にも影響を与えた。だが、100年を迎えた今、先達が目指した「佳き日」には程遠い。

差別意識の克服へ歩み続けるしか途はない

部落解放運動は厳しい差別、弾圧のなか、苦難の歴史を歩み続けてきた。戦後の再出発で法制度を勝ち取り、地域の改善が進んだ。だが、行政依存をもたらし、腐敗墮落を生み、社会的信用を失墜させた。

近年、大衆は組織を離れ、運動は低迷。確かな方向性を描き切れていない。今日の運動状況を結成時の人たちは、どのように評価するのだろうか。

人権意識はかつてと比べて高まった。とは言え、色んな差別が歴然と存在する現代社会。マイノリティへのまなざしは厳しい。解放運動の模索は続くが、地道に差別意識の克服をめざしていくしか途はない。

私たちは水平社宣言の精神に学び、人間の尊厳を尊重しながら、全人類の平等に向け進んでいきたい。

3・11東日本大震災から11年

被災した人々の移ろいはどうなっているのか

2011年3月11日に起きた東日本大震災。あれから11年。大地震・大津波で2万人超が犠牲になった。家並みは消え、瓦礫に埋もれた街が残った。

被災地の復興は続く。だが、インフラ事業が目立つ。過剰な防潮堤が巨費を投じて築かれた。復興増税の使い道が気になる。被災した人々の移ろいや、生活復興はどうなのか。被災地からの発信や被災者の声が少ない。



災害大国の日本。南海トラフ大地震などが想定される。東日本大震災の教訓を生かすため、被災地に思いを馳せ続けたい。風化させないためにも。

フクシマの教訓は原発回帰ではなく原発ゼロだ

一方、福島はどうか。福島第1原発が爆発。放射能汚染は人々の生活、仕事、故郷を奪った。県内には今も避難指示区域が残る。住民は数万人が県内外に避難を強いられている。とても理不尽極まり、残酷だ。

格納容器の底には、溶け落ちた核燃料が残る。廃炉作業が本格化するのはまだまだ先だ。汚染水を溜めたタンクは千基を超える。政府は来春からの海洋放出を目論む。放射性物質トリチウムは残ったままだ。海洋は汚染される。汚染土壌の再利用も画策する。

東京電力に責任を問う裁判も続く。だが、原子力ムラは温暖化を逆手に取り、脱炭素を掲げ、原発維持を企てる。小型炉の開発まで目論む。取り返しの付かない大事故を起こし、人々の人生を破壊しておきながら、原発回帰に向かう。制御不可能な原発は即、ゼロに。

居場所づくりに取り組む

高取町で活動する明見美代子さんがレポート

「一般社団法人なら人材育成協会」が取り組む「みんなの居場所・べいす」の活動を、代表の明見美代子さんに紹介してもらった。



「みんなの居場所・べいす」は昨年3月に高取町でオープン。水・木・金曜日は15歳から60歳を対象に活動する。月・水・金曜日は小学4年生から中学3年生を対象に居場所「べいすくーる」として活動する。



子どもたちは5人。学校とも連携し、出席扱いにしている。大人の居場所は結構にぎわっている。ただ、年齢の幅や、集団が苦手な人もいて、最近は、月1回の男子会・女子会や、中・高生のイベント型も実施している。写真は「子どもカフェ」と「女子会」。

誰もが集う自主的なたまり場ができてきた

仲良くなった人たちが集まり、ゲームをしたり、談笑したり、自主的なたまり場ができています。出会ったころは、覇気がなかった人も、今では元気で若い人たちのお兄さんやお父さんの役割を担ったりもしています。

居場所に来られなくて、ラインでつながっている人もいます。居場所でゆっくりすごしたい人もいれば、一緒に交流を好む人も。中には、働きたいけれど一般就労にはまだ準備が必要な人たちもいます。

そうした人たちのために、昨年5月からは、生活困窮事業を実施している県社協と連携。印刷とソート作業の仕事を受託し、中間的就労訓練の場を月1回、実施している。障害福祉就労のような場がないため、独自で事業展開しているが、少しずつステップアップできる場が必要だと感じている。

昨年、長く会社勤めをして、家庭の事情で1人になり、4年間、ひきこもりをしている男性と出会った。男性

の身内から住む場所がないとの相談を受け、古民家の一室を借りて生活と就労の場を提供したこともある。

社協や地域の人たちと一緒に考える基盤が

何らかのきっかけで規定のルールから外れ、所属できる居場所を失い、その後、新たな居場所を探すことができずに孤立している人たちが。



こうした人たちには、「怠けもの」「甘えている」といった誤解や偏見の目が向けられがちだ。「自己責任」と家族の役割ばかりが大きくなっていく今の世の中。社会の矛盾を感じながら、常識や価値観や社会のありようが問われている気が強くする。

高取町では、3月に町家のひな巡りがある。私たちは親雛のある城跡(きせき)の会場でたこ焼きとみたらしを出店する。また、「町屋のポニー(まちゃポ)」ではシニアの女性たちを中心に「絵画・陶芸展示」と物販販売・カフェを1か月間、実施する。お越しくください。

高取町では、社協・地域の人たちも一緒に考えてくれる基盤ができてつつある。今後も連携を強め、一緒に包摂・共生型の地域社会づくりを進めていきたい。

確定申告相談会を実施

多数の会員がコロナ下での相談で来場

2021年度確定申告相談会は2月7日を皮切りに24日まで、県内9か所で実施＝写真。大勢の会員が来場し、相談を受けた。



また、各市町の会員を対象にした相談会も2月25日から始まっており、3月9日まで実施する。

相談内容としては、持続化給付金や、売り上げ減少などによる経営状態に関するものが多い。今年の相談会もコロナ感染対策を徹底しつつ実施している。

石川一雄さんがビデオメッセージ

狭山事件の再審を実現しようと市民の集い

「第6回狭山事件の再審を実現しよう 市民のつどい in 関西」が2月20日、大阪市内であった＝写真。実行委員会が主催。300人が集った。



集会では、元裁判官で弁護士の木谷明さんが「違法捜査と冤罪」と題してリモート講演。木谷さんは元裁判官で30件以上の無罪判決を確定させている。映画、ドラマのモデルにもなった「伝説の裁判官」だ。

木谷さんは講演で、冤罪事件では違法な捜査が多くなされているとして、白鳥事件や松川事件など、いくつもの事件を例に挙げ、警察の偽装、偽証、隠蔽、でっち上げなどを詳しく説明した。狭山事件も「速やかに再審開始されるべき」と語った。

石川さんが鑑定人尋問・再審開始をアピール

狭山事件の石川一雄さんはビデオメッセージを寄せ、「83歳になった。勝利するまで後押しを」と訴えた。早智子さんもアピールした。狭山は59年にも及ぶ闘い。2006年から続く第3次再審請求では、隠されていた無実の証拠調べ、鑑定人尋問を求めている。

清水事件えん罪被害者家族の袴田ひで子さんは「89歳になった。巖は86歳。勝つまでがんばる」と固い決意を表明した。最高裁は2020年12月に東京高裁に審理のやり直しを命じている。

国賠を闘う青木恵子さんが国の対応を批判

東住吉事件えん罪被害者の青木恵子さんと、湖東記念病院事件えん罪被害者の西山美香さんが登壇。

青木さんは1995年7月、大阪市内の自宅が全焼。入浴中の長女(小6)が死亡した。警察は保険金目的の放火殺人事件として逮捕。1審は無期懲役。再審公判で大阪地裁は2016年、無罪判決を言い渡した。

その後、違法捜査に対して国家賠償を請求。地裁は昨年11月、異例の和解勧告。だが、国や大阪府は応じない。地裁は3月15日に判決を出す。

西山美香さんが「石川さんの闘い見て私も」と

西山さんは2003年、看護助手だった滋賀県の湖東記念病院で患者を死亡させたとして殺人容疑で逮捕された。懲役12年の刑が確定し、服役した。

2017年、大阪高裁が再審開始を決定。大津地裁は2020年、無罪判決を出した。

自白が大幅に変遷している上に、医学的知見とも矛盾していて信用できない。「取り調べや証拠開示などが一つでも適切に行われ



ていれば、逮捕・起訴はなかったかもしれない」と。

西山さんは捜査の違法性を明らかにするため、2020年12月、国賠訴訟を起こした。だが、滋賀県警は違法性はなかったと言い張る。裁判は4月28日に。

山本栄子さんが文字や教育の大切さを語る

京都で識字教室を立ち上げてきた山本栄子さんは

「文字を知らなかった石川さんと私」と題して講演。『歩』『いま、部落問題を語る』の著書がある山本さんは「差別は教育も生活も奪う。石川さんは刑務所で文字を取り戻した」と、文字や教育の大切さを熱く語った＝写真。



大椿裕子・社民副党首、尾辻かな子・前衆院議員、大石あき子・参院議員の3人が連帯アピールした。

太鼓演奏がリモートであった。「太鼓集団 鼓情炎」

「和太鼓いぶき」「和太鼓集団 熱光」の3チームが合同で「真実の響」を演奏して集会を盛り上げた。



集会終了後、阿倍野筋をパレードした＝写真。

判断して見ている私たち

『無意識のバイアス』を読み、差別・偏見を学ぶ

差別は人を傷つけたり、傷つけられたり、とてもナイーブな問題です。なるべくなら、そっとしておきたいと思っても当然です。でも、それは問題の先送りではありません。差別って何？ 差別してはならないというけど、どうすればなくなるの？ そのことが知りたいと悶々としていたとき、この本を見つけました。

書名は『無意識のバイアス』。著者ジェニファー・エバーハートさんはスタンフォード大学心理学部教授で「世界をリードする100人の思想家」に選ばれ、人種問題の研究における第一人者として知られています。

人はなぜ人種差別をするのかを科学的に解明

著者は、バイアスとは数々の関連付けが自動的に思い浮かべられるものだ、と。たとえば、「黒人」と見聞きすると、「ダンスがうまい」「恐れるもの」「屈強」などをです。そして、バイアスはどのように影響を与えるのか、どのように対処すればよいのか、を探求します。

バイアスは個人が人種差別主義者であるかどうかは関係なく、脳の構造と格差社会が作り出した歪んだ

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

五輪反対デモが「お金をもらって動員されている」と。NHKが昨年末、BS番組「河瀬直美が見つめた東京五輪」で、こんな字幕を流した。だが、ねつ造だった。NHKは謝罪。「誤り」としたが、担当者らを軽い処分済ませ幕引きした。デモなどの社会運動に対する偏見を植え付けるNHK。昨年4月にも聖火リレーの中継で沿道からの「五輪反対」の声を消している。国家的事業などに反対する人たちを貶める報道を意図的に続ける。権力を監視すべき報道機関が逆に市民の行動を封殺する有り様だ。「報道の自由度」が世界67位の日本。私たちはメディアも監視しないとイケない。

レンズのようなものだということが明示されます。

自分自身を客観的に振り返ることが大事

本書では、「私たちの目に映るもの」としての潜在的バイアスの科学的説明と、「抜け出す道はあるのか」としての社会における地域コミュニティなどの領域における潜在的バイアスの実態が提示されます。

著者の子ども時代から子育てしている現代まで、アメリカ社会を黒人として生きてきた感情や経験を語り、潜在的なバイアスに立ち向かうには、自分自身を客観的に振り返ることが大事だと指摘します。



潜在的バイアスは脳と社会的レンズの歪み

アメリカの人種差別問題に多くを割いています。肌の色、年齢、人種、訛り、障害、身長、性別など、あらゆる特徴に関してバイアスが存在すると言います。

潜在的バイアスが脳の構造と社会的レンズの歪みであるなら、「脳の構造」が無意識にバイアスを働かせていることを自覚し、差別してはいけないと思考をストップするのではなく、社会的レンズの歪みを矯正できるよう学習していくことが大事なのだと感じました。

黙ってそっとしておくとは差別はなくなるというのは、潜在的バイアスがさらにきつくなるということが科学的実験で実証されているとの指摘には、とても共感できました。

(吉岡弘子)

■『無意識のバイアス 人はなぜ人種差別をするのか』は明石書店刊。2,600円。高史明さん解説付き。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/